

33カ国リレー通信



都市が生み出す力ーリマに暮らす農村出身者たち

八木 百合子

ペルーの首都リマは20世紀後半に急速に人口が増大した。リマ市を含むリマ首都圏(リマ市とカヤオ憲法特別自治区からなる)の人口は1940年の66万1,508人から2010年には916万384人にまで増大しており、半世紀で10倍以上に大きく膨れ上がった。その数値を押し上げたのが、地方の農村から首都に移住してきた人たちである。

アンデスの農村からリマへと移住した人の多くは、村を出てからも出身村とのつながりを保つ一方、都市でもまた親族や同じ村出身者同士が集まって食事を楽しんだり、祭りやスポーツ大会をはじめとするさまざまなイベントを通じて、不断に交流を行っている。それは単なる娯楽にとどまらず、彼らにとっては遠く離れた故郷のことや都市生活に関する様々な情

報を交換する重要な機会にもなっている。

多くの場合、地方出身者は、それぞれの村ごとにクラブやアソシアションと呼ばれる組織を結成している。日系人と言うところの県人会のようなものである。こうした組織が中心となり、イベントの企画や移住者の組織化が行われている。最近では、それぞれのクラブが集会場を持っていることも珍しくなく、地方から移住してきた人たちが多数居住するリマ周縁の地域では、週末になればそこに集う農村出身者たちの姿を散見する。

以下では、ペルー南部アブリマック県の農村を事例に、リマに暮らす農村出身者たちの活動の一端について触れてみたい。

都市で開花する村の祭り

ここで紹介するアブリマック県の農村では、1950年代頃から都市への移住が始まったが、とくに80年代以降は農村部で激化したテロリズムの影響を受け多くの人が都市へと移り住んだ。クスコやアレキパなど近隣都市へと移り住んだ人もいるが、大半はリマへと移住し、首都の周縁に位置するサン・フアン・デルリガンチョ区やサン・マルティン・デ・ボラス区など、いわゆる低所得者居住地域にその多くが暮らしている。正確な数値は把握されていないが、現在、この村からの移住者はその家族も合わせれば、2,000人以上にものぼるとされ、1,000人程度になった村の人口をはるかに超える規模に成長している。

彼らもまたリマに自分たちの集



図：アブリマック県位置図(執筆作成)



写真1 リマの集会場での祭りの様子

会場を持ち、週末になると毎週のように同郷者が集まり、サッカー大会や食事会などを開催している。また、カトリックの祝祭日に合わせて、2月のカーニバル、12月のクリスマス、そして8月には村の聖人に捧げる祭礼を催すなど、村で行われていた祭りを移住先のリマでも行っている。

なかでも、この村の移住者たちの間で最も盛大に祝われるのが、8月の聖人祭礼である。地方から都市へと移住してきた人たちは、どこの村の出身者たちも古くから親しみのある自分たちの村の聖人を祝う祭礼を行うのが常である。とはいえ、リマで行われる彼らの祭りは、村で行われていたものと全く同じというわけでもない。それは、都市の脈絡で新たな形で展開している。この村の場合、村で行われていた闘牛もなければ、祭りの行程も短く、祭り自体が簡略化されている。その一方で、リマではマユラと呼ばれる踊りが大きく開花し、今やこの祭りの目玉となり、多くの参加者を呼び込んでいる。

マユラの踊りでは、参加者である女性たちが、村の伝統的な民族衣装を纏い登場し、葉に見せかけた色とりどりの紙の付いた木の棒

の周りをハーブとバイオリンの演奏に合わせてステップを踏みながら回る。祭りには複数の踊りのグループが参加するが、それぞれのグループがお揃いの色のスカートををはいており、それが自身の帰属を表象しているのが特徴である(写真2)。例えば、祭りではリマでの居住地域ごとに踊りのグループが結成されており、それぞれ異なる色のスカートを選擇している。水色、青、ピンク、橙、赤など異なる色のスカートを身に着けたグループが登場し、その鮮やかさが観客の目を引く。と同時に、踊り手たちの間でも、その華やかさや各グループの規模が大きな関心事にもなっている。

もともと、この村では緑色のスカートを村を象徴するものであり、隣村が赤というように村単位で色が決まっていた。それが移住先では、リマの各々の居住地区ごとに、異なる色のスカートを登場するようになっていく。

これに加えて、親族ごとに一族が同じ色のスカートを登場する場合もある。リマに移住した人のなかには、既に都市で2世代、3世代と新たな世代を形成している家族も少なくなく、それが同じスカートををはいて登場もする。こうし



て、この祭りの踊りは、今やリマに広がる同郷者やさまざまな世代の人々を取り込み、年を重ねるごとに大きく成長しているのである。

祭りを支える活動

こうした祭りの開催にあたっては、多くの費用がかかることで知られる。祭りにはマヨルドモと呼ばれる主催者が毎年選ばれるが、人々に振る舞う酒や食事、衣装、楽団の招待など、これらの費用を捻出するには多大な苦勞を要する。そうした際に、主催者が同郷者たちから経済的な支援や協力を得るために催すものにポジャーダと呼ばれる食事会がある。これは、主催者が用意した食事に参加者が金銭を支払い、主催者がそれで得た収益を祭りの資金に充当するものである。ポジャーダの場合、その名のとおり用意されているのは鶏肉(ポジョ)料理で、一皿300



写真2 お揃いの民族衣装(赤いスカート)を纏い踊りに参加する女性たち



写真3 アンデス農村に建設中の教会堂(写真はいずれも執筆撮影)

円程度で提供される。主に週末に開かれ、同郷者たちが参加するのが大半であるが、それ以外にも友人や同僚、近隣住民が参加することもある。同郷者たちは、ポジャータの開催の知らせがあれば、進んで参加するという。自分たちの祭りのため、あるいは同郷者ならば当然協力すべきと考える人が大半で、こうした同郷者としての意識がポジャータを成り立たせている。

また、祭りにかかる支援については、親しい親族のみで行う食事会もある。この食事会では、主催者に招待された親族が、金銭だけでなく、物資や労働などを提供することを約束する。費用を直接的に現金で支援する者もいれば、ビールなどの酒類や米や野菜などの現物での支援から祭りの間の食事の煮炊きの手伝いなど労働力の提供など、その内容は多岐にわたるが、それぞれの経済力の範囲内で何等かの支援をする。

もともと移住者たちの間でこうした昼食会は、家を新築する際や誰かが海外へ渡航する際など臨時で大きな資金や協力が必要な際に行われてきたものである。またポジャータも、リマでは病人の治療費や学校などでは野外活動費の捻出など、多額の資金が必要になった場合に行われてきた、一種の献金活動である。移住者たちは、これらの都市に展開するさまざまな支援のシステムを積極的に利用し、彼らの祭りの費用を賄っている。

こうした祭りの開催をめぐる展開される支援について、移住者たちは、村で行われていた慣習に例えて「アイニのようなもの」という人もいる。アイニは、農作業

や屋根葺きなど、多くの労働力が必要な際に行われる相互扶助であり、アンデス農村でしばしば見られる慣習である。畑仕事の際に、ある村人に自分の畑で働いてもらえば、次は必ずそのお返しにその人の畑でも働くというものである。彼らの間では、こうした相互扶助の考えが、さまざまな支援の基礎にもなっており、これがまた、都市へと移住した農村出身者の生活や祭りの開催を支える重要な要素にもなっているといえよう。

それは今日、単に移住者同士の支援にとどまらず、出身村へも波及する一つの力となっているのも事実である。

都市から村へ

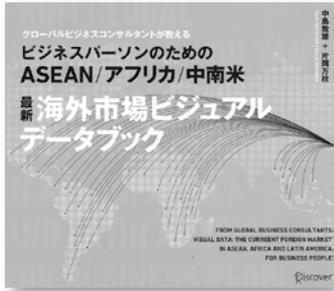
同郷者を中心にリマの移住者たちが展開してきた様々な活動は、当初は彼らの都市での生活の立ち上げや支援のために行われてきたものである。しかし、最近では、それらの活動に出身村の村人が参加してくるケースも少なくない。都市への人口流出により、過疎化した農村では、担い手不足や資金の問題などから、祭りの開催が難しいあるいは縮小化する村も増えているが、そうしたなか、村の祭りの役職者のなかには、都市に出て移住者たちの支援を求める者もみられる。本稿で紹介したアプリマックの農村からも、村人が都市移住者を訪れ、ポジャータを開催し、村の祭りの資金調達をしているという事例がしばしば見られる。都市移住者の経済力は、今や村の祭りを支える重要な要素の一つとなっているのである。

都市移住者たちの力は、それだけにとどまらない。移住者たちの間では、自分たちの村に対する寄

付や支援を積極的に行っている場合もある。その最たる例として、近年顕著に観察されるのが、普段は人気もまばらな寒村に再建される立派な教会堂である。アプリマック県でも、古くなった村の教会堂が都市移住者の寄付や支援により、まるで息を吹き返したようにその姿を取り戻している村や新たな教会堂が建てられ、静かな小村で異彩を放つ光景を目にする(写真3)。

かつて農村から都市へと移住した人たちは、個人の家計を支えることが主要な役割であった。移住が始まり数十年が経ち、都市に増大する家族やその経済力は、今や出身村の祭りの開催や教会堂の建設など、村全体の利益に資する大きな役割も果たしている。その意味で、都市における農村出身者は、村に新たな活気を生み出す大きな潜在力の一つであり、今後の彼らの活動の行方が気になるところである。

(やぎ ゆりこ 国立民族学博物館研究戦略センター機関研究員)



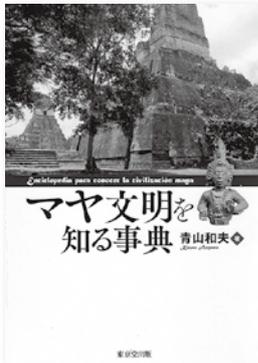
『ASEAN / アフリカ / 中南米 「最新」海外進出ビジュアルデータブック』

中島教雄・片岡万枝 ディスカヴァー
2015年10月 1,800円+税 ISBN978-4-79931775-4

世界的な会計事務所・ビジネスコンサルタントであるプライスウォーターハウスクーパースで、アセアン、中南米、アフリカのビジネス環境調査・コンサルティングを行っている編著者がまとめた、新興諸国でのビジネス展開に資する基礎データ集。「もっと日本が世界を見るべき5つの理由」「海外市場の魅力が分かる10のデータ」から始まり、ASEAN、アフリカ、中南米各地域に「進出すべき10の理由」を挙げ、「各国名鑑」としてそれぞれ10カ国を1頁で進出意志決定ための要点を簡潔に図示している。

各市場の魅力、可能性、進出判断の基礎となる要項が一目で分かるよう、よく工夫されたビジュアル化データを多用している。ラテンアメリカに進出すべき理由としては、日系人の多さ、消費市場規模や今後の成長余力、中間所得層の拡大、女性の購買力の高まり、富裕層の成長、サプライチェーン確立の機が熟しつつあり、日系企業の成功例があること、経済成長に勢いがある、産業構造が日本と補完関係にあることを挙げている。各国編ではアルゼンチン、ベネズエラ、ブラジル、チリ、コロンビア、キューバ、メキシコ、パラグアイ、ペルーおよびウルグアイが取り上げられている。

〔桜井 敏浩〕



『マヤ文明を知る事典』

青山 和夫 東京堂出版
2015年11月 336頁 2,800円+税 ISBN978-4-490-10872-9

紀元前1000年から16世紀まで中米で独自の石器の都市文明を築き、建築・文字・暦・算術・天文学を高度に発達させた、旧大陸の四大古代文明に匹敵するマヤ文明を知る上で有用な事典。

第1部ではマヤ文明の特色、現代の考古学から解明された実像を解説し、第2部で事典として地理・環境、交通・交易、暦・算術・天文学、文字、歴史を事項別に、古代マヤ社会の諸王朝・都市を遺跡別に、当時の戦争の実態、神殿ピラミッドはじめ優れた石造建築、日常生活道具や生活、儀式・行事、世界観と神話・宗教、美術・工程、生業と食料等作物をそれぞれ事項・品目別に解説している。第3部は現代に生きるマヤの人々の概況を現代史を交え紹介し、スペイン征服者・探検家のマヤ文明観と科学的な考古学、日本人とマヤ文明研究の関わり、歴史教科書や“謎”を強調する見方の誤り、マヤ文明の盛衰の歴史からの教訓を説いている。この種の事典では共同執筆がほとんどだが、一人の研究者が自身の研究成果を基に一貫した史観でマヤ文明を解説した労作。

〔桜井 敏浩〕